

見えない痛み気付く目を

小六

ある日、駅の改札で、

「早く行けよ、じゃまなんだよ。」

という声が聞こえました。

声の主は、足の不自由な男の人の後ろに立っていた、イライラした表情の男性でした。足の不自由な男の人は、ゆっくりと足を引きずりながら歩いていました。私も周りの人々も、何も言わずにその場を通り過ぎました。

私はその言葉が頭からはなれませんでした。なぜ、こんなにも冷たい言葉が言えるのでしょうか。足の不自由さは、その人にとって毎日の生

活でとても大きな困難をとまらうものだと思います。それに、見た目でわかる痛みは、周りの人々が想像している以上に大きいはずですよ。でも、言葉でさらにその人を傷つけることは、何の解決にもなりません。むしろ、傷つけ合うだけです。

私は、過去に足を骨折したことがあります。松葉づえをついて歩かなければならず、階段を下りるのも一歩一歩が大変でした。普段は当たり前前にできていたことが、できなくなることの苦しさを感じました。特につらかったのは、周りの人が私の困っている姿を見ても、何も言わずに通り過ぎていくときです。助けを必要としていることを伝えられずに、ただだまっていることがさびしく感

じました。でも、友達が、

「荷物を持つよ。」

「だいじょうぶ？」

と声をかけてくれたとき、その一言がどれほどうれしかったことか。言葉にすることで、私は一気に安心できましたし、少し元気をもらった気がしました。友達の優しさが、私にとって何よりの支えだったのです。あるとき、私は「こんな小さな言葉が、こんなにも大きな力になるんだ。」と実感しました。

しかし、すべての人がこうして助け合い、支え合っているわけではありません。駅で見たように、足の不自由な人に対して冷たい言葉を投げる人がいます。言葉一つで、相手の心に大きな傷をつけることができる

のだということを、私たちはもっと理解するべきです。心ない一言が、その人の一日を、いや、一生を変えてしまうかもしれません。

だからこそ、私たちは「見えない痛み」に気付く目」をもたなければならぬ。私は強く思います。体に障害のある人々、例えば車いすを使っている人や、視覚や聴覚に障害がある人たちは、私たちが思っている以上に大きなかべにぶつかりながら一生けん命生きています。そのかべは、周りの無理解からくる偏見や、時には心ない言葉によって、さらに大きくなってしまうことがあります。私たちができることは、まず「見よう」とすることです。自分が何かを感じ取ること、少しでもその人

のつらさや痛みを理解することができ
るからです。見えない痛みを無視
することなく助けるために行動を起
こすことが、私たちの責任だと思
います。私ができることを考えたとき、
まず思いうかんだのは、「声をかける
こと」でした。例えば、電車やバス
の中で大変そうに荷物を持っている
人がいたら、「お手伝いしましょう
か。」と声をかけること。それだけ
も、相手にとってはどうだけ心強い
かわかりません。また、街中で困っ
ている人を見かけたとき、何も言わ
ずにそのまま通り過ぎるのではなく、
「どうしたのですか？」と声をかけ
ることも大切だと思います。こうし
た小さな気付きが、少しずつ大きな
力になっていくのではないでしょう

か。さらに大切なのは、障害のある
人々に対する偏見^{へんみん}をなくすることです。
彼らの「ちがうところ」を見て、そ
こに無理解や差別の目を向けるので
はなく、その人がどんなに強く生き
ているかを見つめることが必要です。
私はこれからも「見えない痛みに
気付く目」を大切にして、身の回り
の人々に優しく接していきたいと考
えています。そして、優しさが当た
り前の社会を作るために、自分がで
きることを一つずつ実行していきま
す。